



PRESS RELEASE

PRISM BioLab とエーザイが共同創出した E7386、 エーザイが米国がん学会（AACR）年次総会にて非臨床研究結果を発表

2026年4月6日：一株式会社PRISM Biolab（本社：神奈川県藤沢市、以下「PRISM BioLab」）は、このたび、当社とエーザイ株式会社（本社：東京都文京区、以下「エーザイ」）により共同創出されたE7386（*1）について、2026年4月17日から4月22日まで米国・カリフォルニア州サンディエゴにおいて開催される米国がん学会（American Association for Cancer Research：AACR）年次総会（AACR Annual Meeting 2026）において、非臨床研究におけるレンバチニブメシル酸塩（製品名：「レンビマ[®]」、以下「レンバチニブ」）（*2）との併用結果がエーザイにより発表される予定であり、アブストラクト（研究概要）が開示されましたので、お知らせいたします。

発表の詳細につきましてはアブストラクトをご確認ください。

エーザイは、現在、レンバチニブとの併用によるE7386の臨床試験を、子宮内膜がん（endometrial carcinoma：EC）を含む進行固形がんの治療を目的として実施しています。（NCT04008797（*3））

【概要】

タイトル：Antitumor and antiangiogenic activities of E7386 in combination with lenvatinib in human endometrial carcinoma xenograft models

（邦訳：ヒト子宮内膜がん異種移植モデル（ゼノグラフトモデル）（*4）におけるレンバチニブ併用下でのE7386の抗腫瘍作用および抗血管新生作用）

【発表要旨】

背景：E7386は経口投与可能なCBP/ β -カテニン相互作用阻害剤である。現在、主にVEGFRおよびFGFRを標的とするマルチチロシンキナーゼ阻害薬であるレンバチニブとの併用によるE7386の臨床試験が、子宮内膜がん（EC）を含む進行固形がんの治療を目的として進行中である（NCT04008797）。我々はこれまでに、肝細胞がん腫瘍モデルの非臨床試験において、E7386とレンバチニブの併用が、それぞれの単剤投与と比較して、より強い抗腫瘍効果および腫瘍内微小血管の減少を示すことを報告した。本研究では、複数のECゼノグラフトモデルを用いて、E7386とレンバチニブ併用療法の抗腫瘍作用および抗血管新生作用を検討した。

方法：ヒトEC細胞株（HEC151、HEC251、JHUEM2、およびHEC50B）を皮下に接種したECゼノグラフト腫瘍を有する雌ヌードマウスに対し、E7386を6.25～50 mg/kg（経口投与 [PO]、1日1回 [QD]）および

／またはレンバチニブ10 mg/kg（PO、QD）を7～14日間投与した。ホルマリン固定・パラフィン包埋した腫瘍サンプルを用い、抗CD31抗体による免疫組織化学染色により腫瘍内微小血管を解析した。

結果：E7386とレンバチニブの併用は、いずれのECゼノグラフトモデルにおいても、重度の体重減少（体重減少率20%超）を伴うことなく、各単剤投与と比較して抗腫瘍効果を増強した。特に、HEC251およびHEC50B モデルでは、併用治療により腫瘍退縮が認められた。抗腫瘍効果の増強は、E7386を25 mg/kgおよび50 mg/kgで投与した場合において、モデル間で一貫して観察された。HEC151モデルにおける腫瘍内微小血管解析では、レンバチニブ単剤投与により微小血管密度の低下が認められ、併用療法ではレンバチニブ単剤投与と比較して、より強力な抗血管新生作用を示した。

結論：これらの結果から、E7386とレンバチニブの併用は、レンバチニブ単剤投与と比較して腫瘍微小血管に対する抗血管新生作用をより強く発揮し、ECゼノグラフトモデルにおいて高い抗腫瘍活性を示すことが示唆された。

<解説>

(*1)E7386について

エーザイと共同創出した経口投与可能なCBP/ β -カテニン相互作用阻害剤であるE7386は、がん細胞の悪性化に関与するCBP/ β -カテニンシグナルの下流において、 β -カテニンとCBPのタンパク相互作用を阻害する経口低分子薬です。2021年10月にPOC(Proof of Concept)を達成し、現在は単剤での固形がんを対象とした第Ⅰ相臨床試験のほか、他の抗がん剤との併用による固形がんを対象とした後期第Ⅰb相／第Ⅱ相臨床試験が、エーザイにより実施されています。

(*2)レンバチニブ（製品名：「レンビマ」）について

レンバチニブは、血管内皮増殖因子受容体（VEGFR）であるVEGFR1、VEGFR2、VEGFR3や線維芽細胞増殖因子受容体（FGFR）のFGFR1、FGFR2、FGFR3、FGFR4に加え、血小板由来増殖因子受容体

（PDGFR）のPDGFR α 、KIT、RETなどの腫瘍血管新生あるいは腫瘍悪性化に関与する受容体型チロシンキナーゼに対する選択的阻害活性を有する、経口投与可能なエーザイ創製のマルチキナーゼ阻害剤です。

非臨床研究モデルにおいて、レンバチニブは、がん微小環境における免疫抑制因子として知られている腫瘍関連マクロファージの割合を減少させ、活性化細胞傷害性T細胞の割合を増加させることで、抗PD-1モノクローナル抗体併用時は、レンバチニブおよび抗PD-1モノクローナル抗体のそれぞれの単剤療法を上回る抗腫瘍活性を示しました。

(*3)NCT04008797試験について

エーザイが実施している固形がん患者を対象としたE7386と他の抗がん剤との併用療法を評価するための非盲検第Ⅰb/Ⅱ相試験です。臨床試験の詳細につきましては、ClinicalTrials.govをご覧ください。

<https://clinicaltrials.gov/study/NCT04008797>

(*4)異種移植モデル（ゼノグラフトモデル）について

異種移植モデル（ゼノグラフトモデル）とは、ヒトのがん細胞や腫瘍組織を、免疫機能を抑えたマウスなどの実験動物に移植し、体内で腫瘍を形成させる実験モデルのことです。

ゼノグラフトモデルを用いることで、ヒトのがんに近い状態を生体内で再現し、がんの増殖や血管形成の様子、ならびに抗がん剤などの治療薬の効果や作用機序を評価することが可能になります。

【株式会社 PRISM BioLab について】

PRISM BioLabは、独自に開発した α -ヘリックス・ β ターン模倣技術を活用して、低分子化合物によるタンパク質-タンパク質相互作用（PPI）の制御による創薬を目指している企業です。PRISM BioLabは、従来困難であった細胞内で様々な信号を伝達するPPIを制御する独自のペプチド模倣技術である『PepMetics[®]』を構築し、がんや線維症分野の臨床パイプラインを創出するとともに、国内外の多数の大手製薬会社と提携してこれまでに無い難病治療薬の創出に取り組んでいます。

詳しくは、<https://prismbiolab.com/ja/> をご覧ください。

【PRISM Biolab 会社概要】

社名 : 株式会社PRISM BioLab (PRISM BioLab Co., Ltd.)
創業 : 2006年11月
本社所在地 : 神奈川県藤沢市村岡東二丁目26番地の1 湘南アイパーク
事業内容 : 創薬技術開発及び創薬
代表取締役 : 竹原 大
U R L : <https://prismbiolab.com/ja/>

<本件に関するお問い合わせ>

株式会社PRISM BioLab

Tel : 0466-53-8383

E-mail : info@prismbiolab.com